1950年代の長期欠席の子どもたち: 漁業地帯の労働・生活と教育

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-04-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00053888

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

一九五〇年代の長期欠席の子どもたち

――漁業地帯の労働・生活と教育――

金沢大学
人間社会研究域学校教育系
准教授　鳥居　和代

1　一九五〇年代の子どもの長期欠席問題

敗戦後の社会的混乱と人々の生活窮乏のなか、新たにスタートした六・三制義務教育制度のもと、小学校や新制中学校を長期欠席する子どもたちが多数にのぼったことは、よく知られている。戦後、最も早い時期の公立小学校・中学校における長期欠席児童生徒調査によると、年間三〇日以上の欠席者の割

合は小学校よりも中学校の方が高く、小学校では「病気」を事由とするものが最多の三七・九％、次いで「家事家業の手伝い」を事由とするものが二五・四％であったのに対し、中学校では「家事家業の手伝い」を事由とするものが五〇・五％と約半数を占めた（中央青少年問題協議会編一九五〇）。小学校高学年から中学校に至る年齢ともなると、一家の働き手として家計を助けるために、学校を欠席する子どもたちが少なくなかったのである。石川県においても、新制中学校では生活難のために登校不可能な生徒がいたことが大きな問題となっており、ことに長期間登校しない生徒は金沢市内に多かったといわれる（石川県教育史編さん委員会編一九七七）。

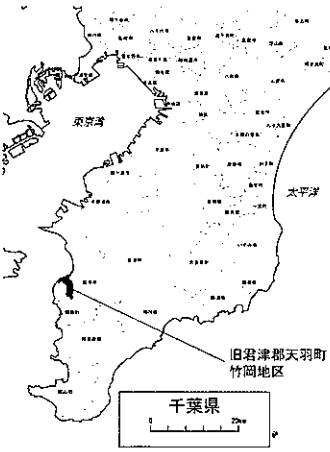
一九五〇年代、子どもたちの長期欠席そのものは全国的な現象であった。そうしたなかで、実質的に不就学といってもよいほどの極めて深刻なかたちで、長期にわたって連続欠席する子どもたちが数多く生み出された地域もあった。そのような特質をもつ地域の一つが、臨海の漁業地帯（漁町村）であった。

本稿では、長い海岸線を有する海に囲まれ、古くから水産業が発達してきた千葉県を事例に、一九五〇年代における沿岸漁業地帯の子どもたちの労働・生活と長期欠席との関係、および長期欠席の子どもたちへの学校教育の働きかけについて、歴史資料を紐解きながら、以下に紹介したい。

本稿の叙述にあたって、主として依拠する資料は、『長期欠席の子どもたち』（千葉県教育研究所、一九五七年）である。千葉県教育研究所（現、千葉県総合教育センター）の『研究紀要』第三三集として発行されたものである。本資料では、長期欠席の子どもたちが比較的多かった県内の漁業地帯にある三学区が選定され、一年間の調査研究の結果がまとめられている。目次は次のとおりである。

はじめに
第一章　揚繰網漁業地帯の長期欠席の子どもたち
—旭市矢指・富浦地区の場合—
第二章　揚繰網・小舟漁業地帯の長期欠席の子どもたち—銚子市高神地区の場合——
第三章　一本釣・小網漁業地帯の長期欠席の子どもたち—君津郡天羽町竹岡地区の場合——
おわりに

ここでは、紙幅の関係上、すべての内容を紹介することはできないため、さしあたって第三章の君津郡天羽（あまは）町竹岡地区（現、富津市。図表1参照）の事例に焦点を当てて、一九五〇年代の千葉県沿岸の一本釣・小網漁業地帯における長期欠席の子どもたちの労働・生活と教育の様相を捉えてみたい。



図表1

2 千葉県君津郡天羽町竹岡地区の漁業と漁民層

一九五五年三月三一日、湊町、天神山村、竹岡村および金谷村を合併して、新たに天羽町が設置された。合併により消失した竹岡村であるが、その後も旧町村単位の意識や行動、組織がいくつか存続し、ある程度の公的生活の単位として竹岡地区が成り立っていた。五六年度の竹岡地区の戸数は七三一戸であり、これを職業別にみると、農業二三八戸、漁業二四三戸、工業五戸、商業八五戸、公務員二五戸、自由業二一戸、林業五戸、その他一〇九戸であった。大部分は農業・漁業に従事し、それらの戸数も半々の典型的な農漁村であった。ただし、竹岡地区の私的生活や日常生活の単位は、さらに細分化された七つの集落単位に行われることが多く、一つの集落に農家と漁家とが混在することはほとんどなかった。漁業集落と農業集落では異なった地区が形成されていた。

竹岡地区の漁業は、歴史を辿れば、全国的に商品作物の栽培が盛んになり、干鰯のような高価な肥料が使用されるようになった江戸時代の中期以後に急激に発達した。竹岡地区の漁家は、紀州を主とした関西から出稼ぎに来た移住者によるものであり、かつての百首や荻生の海岸に密集集落を形成した。白狐川が形成した河岸段丘に点々と位置した農家とは、風俗習慣も若干異なるものがあり、婚姻関係などに

おいてもさほど密接な関係を持たなかった。一九五〇年代半ばの竹岡地区の漁業は、古くから存在した親方―子方（網元―船方）関係や、明治以降の魚群の減少とイワシ漁業の後退などを背景に新たに台頭した魚仲介商の支配からも脱した、平均的な漁家漁業が大部分であった。

竹岡地区の社会階層の構造は、調査研究報告では次のように捉えられていた。まず上層には、地主層、山林所有の旧自作層、飯米所有の商人層などが位置する。この層から地区の代表者はほとんど選ばれ、互いに縁戚関係にある者も多い。次に中層には、魚仲介商や漁加工業者、漁業経営者などの層があり、この層とある分野では並行して、ある分野では一段下って存在するのが、自作農層（旧小作層）である。また、これらの層と並行して、若干の商工業者が位置する。さらに下層には、漁民層がある。これは漁船や漁具の所有の程度によってさらに二層に分かれ、上位が有動力船層、下位が無動力船層と被雇傭者層に分かれる。このような社会階層を反映して、竹岡地区においては上層と中層が指導階層と考えられ、学校関係の問題についても、漁民層の要求や意見が漁民自身によって教育の領域に持ち込まれることは、なかなかあり得なかった。竹岡地区の中でも、漁民たちは圧倒的な少数者であった。

3 竹岡地区にみる長期欠席の子どもたちとその背景

竹岡小・中学校の子どもの長期欠席問題にかかわる歴史的変遷について、竹岡中学校は次のようにまとめていた。大正末、小学校には各級に未就学に近い二～三名の男女の長期欠席児童と、かなりの断続的な長期欠席児童がいたが、これらは漁業地区に限られていた。この頃から、長期欠席児童をもって特別学級をつくり、校長が主としてこれを担当した。昭和になって青年訓練所、青年学校（青年訓練所と実業補習学校を統合した勤労青少年のための定時制の学校。一九三九年に一九歳まで男子義務制実施）が設置されると、漁村の青年の欠席者が多く、しかも彼らの多くは小学校未卒業者であった。戦争中は日々、勤労作業だけが行われ、欠席問題についても

あまり関心が払われなかったが、かなりの数が学校に出席しないで、家事に従事していた。敗戦後は、漁村における経済的疲弊と徴兵制度の廃止、義務教育の延長により、家族労働に頼る漁民の生活に著しい影響を与えた。

こうして戦前、戦中を通して存在した長期欠席の子どもたちは、戦後になって次第に増加し、竹岡村では一九五一年度に竹岡小学校六二名、竹岡中学校七八名と頂点に達した。その後、町村合併後の五六年度初頭においては、竹岡小学校八名、竹岡中学校五二名と漸減したとはいえ、竹岡地区では中学校において依然として子どもの長期欠席が大きな問題として残された。五六年四月一日現在の竹岡中学校の長期欠席生徒調べによると、集落別および職業別の長期欠席生徒数は、図表2・3のとおりであった。長期欠席生徒は漁業集落に集中しており、長期欠席生徒総数の七〇％以上が漁業関係者の子どもたちであった。長期欠席と漁業との結びつきは色濃いものがあった。

それでは、なぜ漁業地帯において長期欠席の子どもたちが数多く生み出されたのだろうか。千葉県教育研究所の調査研究報告によると、ほとんど家族のみで行われる漁家経営で、一本釣・小網漁業が営まれる竹岡地区においては、長期欠席の子どもたちが生み出される理由は、一応常識的に言われているようないわゆる貧困が原因ではないと考えられる、と結論づけた。それは、イワシのような大衆魚は減少したものの、さまざまな魚類が四季を通じて捕獲さ

図表2　竹岡中学校の集落別長期欠席生徒数（1956年4月）

集落＼男女	地区の特徴	男子	女子	計
1	漁	8	6	14
2	漁	15	7	22
3	商・農	—	3	3
4	農	—	—	—
5	農	1	—	1
6	漁兼農	—	6	6
7	漁	5	1	6
計		29	23	52

図表3　竹岡中学校の職業別長期欠席生徒数（1956年4月）

職業＼男女	男子	女子	計
純　漁	15	11	26
漁兼農	10	1	11
純　農	—	3	3
船　員	—	2	2
工　員	1	—	1
日　傭	—	4	4
公務員	1	—	1
土　木	—	1	1
建具職	1	—	1
無　職	1	1	2
計	29	23	52

れ、全漁家数の三〇％以上が畑作を兼業し、一本釣り漁については東京からの釣り客の船頭としての収入があるなど、竹岡地区の漁家総数の九〇％が、収入が必ずしも他の産業人に比して低くはないこと、また長期欠席の子どもの家庭の年収が平均水準より高い場合があることなどを根拠としていた。

ただし、調査研究報告において、漁家漁業にあっては、かなり高い収入を維持するためには、子どもも労働に参加せざるを得なかった点に注意が払われていたことは重要である。すなわち、生産量の減少した、競争の激しい漁家漁業では、雇傭者を使用する余裕はほとんどない。自家労力を無限に投入することによって、収入を維持する以外に打開の方法は見出せない。そのため、操業回数を増やして労働時間を延長し、全家族労働力を漁業に投入することが行われる。さらに、生産手段を切り下げて、漁具を購入せずに家族で製作し、自ら網の修理に当たる。そればかりでなく、漁獲技術の機械化の方向をとらずに、漁師自身の名人芸的能力の向上が指向される。これらのことが、子どもたちにも労働への参加を要求することになるというのである。

関連して、子どもたちの長期欠席と労働参加に関する二つの具体例をみてみたい。

生徒Ｙの家は釣職専門の漁家である。二時間はかかる富浦沖の大鯛釣りに父親の助手として出かける。客のある日は午前二時頃から、客がなくとも三～四時には起きて出漁する。漁場では父親がひっかけた魚のテグスをたぐり、これを切らないように釣り上げる技術がなかなか難しい。動力船の機械操作はほとんど生徒Ｙが任されている。帰宅すると同じ長期欠席同士の遊び仲間とすぐに遊びに行く。夕飯を食べると、朝早いので遅くとも八時頃には寝る。時化（しけ）の日には学校に行く（「時化学級」については後述）。

生徒Ｍの家は網職専門の漁家である。竹岡沖で波が静かな時には「赤にし網」、波が荒れている時には「かに網」をかける。朝は三～四時に起き、昨夜かけた網をたぐりに行く。手入れが終わると昼過ぎになる。しばらく休んでから出漁の準備をし、網をかけに行く。かけ終わると帰宅して、夕飯まで暇があると、長期欠席の友だちの所に遊びに行き、帰宅

して夕飯を食べ、八時頃には就床する。時化の日には、朝、沖に行って網を上げてから学校へ行く。学校が終わると、映画を友だちと観に行くか、家で網の繕いをする。遊ぶ暇はあまりない。

これらの事例に示されるように、長期欠席の子どもたちを生む重要な原因の一つは、竹岡地区の漁業の生産のしくみにあった。とくに生徒Yの例にみるように、竹岡地区では釣り漁業という漁業形態・漁法にかかわって、一本釣りの技術を修得するために、学校に行かせるよりも早いうちに漁に参加させることを優先する考え方が根強かったことが考えられる（鳥居二〇一七）。漁家漁業では、時化による休漁が一年間の三分の一くらいはあったため、出漁しない時間を教育に振り向けることが課題とされた。

しかし、長期欠席の問題は、生産のしくみだけが原因とは考えられていなかった。それは出漁する男子については当てはまるとしても、女子には当てはまらないとして、生産のしくみと絡み合った漁民意識の問題が、次にクローズアップされることになる。調査研究報告によれば、長期欠席の子どもたちの親の姿勢として、生活のためには子どもも漁業生活に参加し、学校を欠席することは仕方がないという考え、よりよき漁師になるためには、早期に仕込まなければならず、それは学校に出席することよりも大切なことであるという考え、学校の勉強は、漁師の生活にはさほど役に立たないという考え、あまり勉強のできない子どもが、あまり役に立たない学校に行っても無駄だという考えがあり、同様の姿勢は女子に対してもあるというのである。したがって、女子が「学校がきらいになって」欠席しても、深くはとがめない。実際、竹岡地区の長期欠席の女子は、都市に向かい、女中奉公することが多かった。しかも、かなりの数がいわゆる水商売といわれていた。以上のような竹岡地区の漁民の教育に対する意識は、漁民のもつ「非近代性」の現れとして認識されていたのである。

4 竹岡小・中学校における長期欠席問題への取り組み

竹岡小・中学校は、一九五二年度から長期欠席の

子どもたちへの対策に取り組んだ。最も努力を傾注したのは、出席の督励であった。五五年度には、小学校はほとんど全児童を学校に出校させることができた。しかし依然として残ったのは、中学校の長期欠席であった。中学校の教育現場がとくに重点的に努力したのは、家庭訪問であった。その際、学校への出席に承諾が得られるよう親を説得し、出漁できない時化の日に登校する「時化学級」への出席が勧められた。

竹岡中学校における時化学級の取り組みは、ただちに一般学級の生活に入れない子どもたちをどうするかという問題への突破口として見出されたものであった。竹岡中学校は一九五二年九月一一日、長期欠席生徒の父兄に漁業協同組合に集まってもらった。そこで竹岡村長と中学校長より、長期欠席対策として週一回の特別指導が提案され、決定された。長期欠席生徒のための特別学級は、こうして漁業協同組合事務所を教室として発足した。五三年七月には、生徒の自発的意見によって、今後は中学校において特別授業を受けることに決定し、同月四日に最初の授業が行われた。

その後の経緯を補足しておく。一九五五年度からは、千葉県教育委員会から「長欠対策教員」が竹岡中学校に配置された（千葉県教育要覧編集委員会・千葉県教育庁庶務課編一九五五～六〇）。さらに、五八年一〇月に各方面との話し合いの結果、一週間のうち決められた二日と時化の日は必ず長期欠席の子どもを登校させることになり、中学校では「補導学級」（従来の時化学級）に受け入れて教育するようになる（千葉県教育庁庶務課編一九五九）。

竹岡中学校の時化学級は、雨天の日や風の日に限られていたため、その日は一般の学級の理科の授業は普通教室を使用することとし、理科室が時化学級の教室として使用された。男女別々に授業する必要がある時は、手の空いている女性教員がミシン等の指導にあたった。また、多数出席して長欠対策教員一人では手が足りない時は、随時に学級担任が指導に参加した。

時化学級の生徒たちの学習については、次のように報告された。一般に漢字を綴る能力、読む能力の

低下が非常に激しく、他方、数の計算は割合に興味をもって学習するものの、国語能力の低下とかかわって、文として表現された数の性質について考えるような応用問題を苦手としている。計算したものに対しては、綿密に調べて、できているものには丸をつけてやる、しかも黒鉛筆や黒インクでは駄目で、赤鉛筆や赤インクではっきりつけてやると、丸をつけてもらえる嬉しさに、長欠対策教員は全部の生徒から引っ張りだこになる。女子はミシンを踏ませておけば、ほとんどが半日でも飽きずに材料に取り組んでいる。男子の興味はさまざまで、野球、幻燈、エンジンの分解組み立てなどである。このように、長期欠席のために学習が遅れた子どもたちに対しては、国語や算数などの小学校程度の読み・書き・計算の学習をはじめ、職業・技術的な教育内容やレクリエーションなどが用意された。

時化学級について「問題点」として指摘されていたのは、時化学級の生徒の大多数が三〇分間じっと机に向かって腰を掛けていることができないこと、黙って人の話を一〇分間も聞くことができないこと、教科書でも何でもそっと机に置くことはなく、必ず投げるか机に叩きつけること（釣った魚を舟に投げ入れる習慣から来たもの）など、長期欠席の子どもたちの生活態度の問題であった。また、時化学級の課題としては、将来の生活に必要なさまざまな問題解決と結びついた教育課程の再編成と、それを展開するためのプロジェクト・メソッド（二〇世紀初頭のアメリカのキルパトリックによる進歩主義的な教育方法）による学習が挙げられた。

最後に、調査研究報告では今後の問題として、学校における教科学習のプロジェクト化と教科外活動の充実、さらに、漁村社会の人々が自分たちの生活に子どもを参加させる要求をある程度犠牲にしてでも、学校に子どもを出したいという意欲を起こさせるために、教育を受けたことによって成功した事例を漁民の人々にぶつけて、イメージを作り上げることが必要であるとの今後の方向性が示された。

5 まとめに代えて

本稿では、千葉県教育研究所の調査研究報告を取

りまとめた『長期欠席の子どもたち』を手がかりに、一本釣・小網漁業地帯である竹岡地区の一九五〇年代の歴史的事例を紹介してきた。以下に、若干のコメントを提示してまとめに代えたい。

第一に、学校の価値を認めないといった漁民層の教育への意識を、漁民たちの〝遅れた〟意識とみなして「非近代性」の問題に解消させてしまうことには、慎重である必要があったように思われる。千葉県教育研究所の調査研究において着眼点の一つであった漁業の生産のしくみ、具体的には、家族経営が基本の一本釣りや小網漁を営む漁民たち（とくに男性・男子）の日常的な労働・生活の様式は、とりわけ戦後新たに義務制となった中学校の教育システムとはただちに整合しえなかった。竹岡地区の漁民たちの教育への姿勢は、新しい義務教育のシステムに対応しきれない、ある種の漁業形態の特質から必然的に生じたものであった点に、留意しなければならないだろう。このことは、時化学級に通う生徒たちの学習の様子に表れていたように、彼・彼女たちが当初、新制中学校の生活文化や学校規範なるものに馴染めなかったこととも関係している。

第二に、竹岡地区において、出漁する男子ばかりでなく女子にも長期欠席が広がっていた問題を考えるうえで、漁民層の長期欠席現象の背後にあるものをより広い視野で捉えることも可能であり、必要であったと考える。今回紹介した調査研究報告の中では言及されていないが、朝鮮戦争のさなかにあった一九五一年一月、君津郡富津岬から神奈川県横須賀市旗山崎にかけて、アメリカ駐留軍の軍事施設として防潜網（東京湾への潜水艦の侵入を防ぐための鋼鉄製の網）が設置されたため、五五年四月まで漁船の航行は不可能になった。さらに五二年一月、海上保安庁は、天羽町（湊、竹岡、荻生）地先から横須賀市旗山崎および観音崎を結んだ海域四七平方キロメートルを投錨禁止区域に指定した。その後、五五年四月に禁止区域が約七分の一に縮小され、駐留軍の使用外となって自衛隊へ移管されるのが五八年七月のことであった（富津市史編さん委員会編一九七九）。富津岬周辺の軍事施設にともなう竹岡地区の漁業と漁民生活への影響、および漁民層の子どもた

ちの長期欠席との関連については、検討課題として残されたといえる。

第三に、竹岡中学校における時化学級＝長期欠席の子どもたちの特別学級の意義や限界を、同時代に都市部を中心に設置された「夜間中学校」（夜間学級）との関連において、別途考察する必要がある。夜間ではなく昼間に開設された時化学級・補導学級は、直接、一般学級への復帰が困難な長期欠席の子どもたちに、教育の機会を確保するための特別な場であった。ただし、復帰を念頭に置いた場合、漁民層の子どもたちの学力や生活習慣の問題ともかかわって、特別学級が抱える課題は複雑であった。一九五〇年代において、漁業や年季奉公などの日中の労働のために長期にわたって義務教育から遠のいていた子どもたち、その結果として、年々生み出された学齢満期による除籍者ないし学齢超過者の学びの保障をめぐる問題に、千葉県の例にみる時化学級・補導学級のシステムがそもそも応えうるものであったのかどうかが、改めて問われなければならないだろう。今日拡充が進められている夜間中学校とあわせて、それが設置されなかった地域における特別学級についても、その歴史的な検証が求められるのである。

〔参考文献〕

石川県教育史編さん委員会編『石川県教育史』第三巻、石川県教育委員会、一九七七年。
千葉県教育研究所『長期欠席の子どもたち』一九五七年。
千葉県教育庁庶務課編『教育広報』第五八号、一九五九年九月。
千葉県教育要覧編集委員会・千葉県教育庁庶務課編『教育要覧』（昭和二九年度～昭和三四年度）千葉県教育委員会、一九五五～六〇年。
千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』（通史編・近現代3）千葉県、二〇〇九年。
中央青少年問題協議会編『第三回青少年保護育成運動　青少年問題協議会の手引』一九五〇年。
鳥居和代「一九五〇年代の千葉県『教育広報』の長期欠席関係記事（7）・（9）」、近代日本教育史料研究会『かわら版』第三六五・三六七号（二〇一七年二月・三月）。
富津市史編さん委員会編『富津市史　史料集一』富津市、一九七九年。

〔付記〕本稿の一部は、JSPS科研費（課題番号二五七八〇四六九）の助成によるものである。